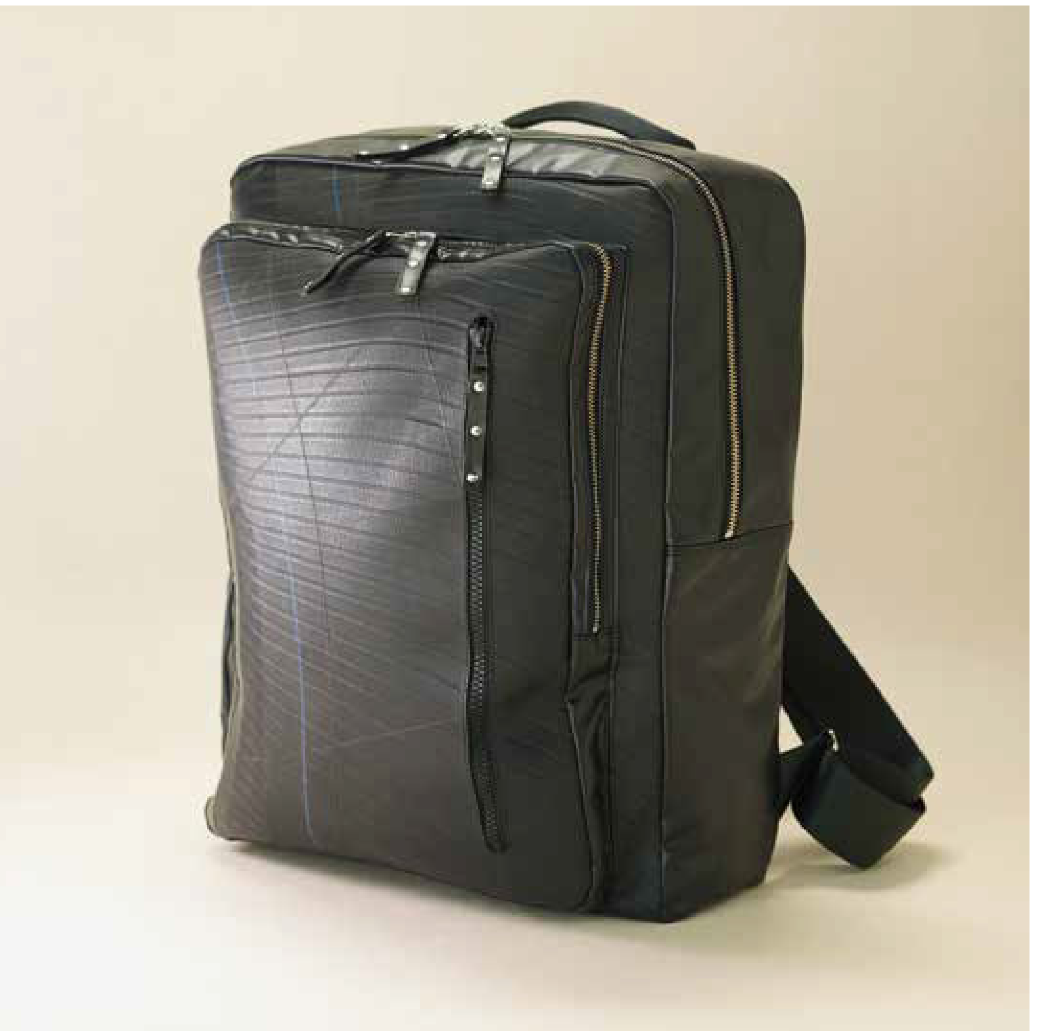
広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

〝誰かのための何かに〟 廃材だから生まれる輝き

水野浩行　愛知／エシカルデザイナー

ファッションを通じて地元を元気に


完成プロダクト「Keep Toyota tradition alive」

日本を代表する自動車産業都市・愛知県で、エシカルデザイナーとしてブランド「モデコ」を展開する水野さん。「エシカル」とは、環境保全や社会環境に配慮するものづくりのことで、ここ数年日本でも盛んに使われるようになった。ブランドを代表する作品は、自治体から依頼されて作った消防服から生まれたバッグ。使わなくなった消防服を縫製し直し、バッグとしてよみがえらせている。ほかにも廃材となったシートベルトやフローリング素材を利用したバッグもある。

産業廃棄物を再利用するにあたり、水野さんが心がけているのは、デザイナーが作りたいものを作るのではなく、素材のよさや特徴を見極め、活用すること。「使われなくなった廃材を、どうやって魅力的なものに見せるか。素材がもつ本来の美しさを最大限に生かすデザインにしたい」。

今回のプロジェクトでは愛知の匠として、自動車の廃棄物から何かを生み出そうと、アイデアを発案。LEXUS側の協力により、使用しなくなったガズーのレーシングスーツを3着譲り受け、ブランドロゴとカラーを前面に出したボストンバッグと廃タイヤのチューブを使ったビジネスバックパックを完成させた。

TOYOTA GAZOO Racing
GR

水野さんがこだわったのは、「誰かのための、何かになること」。まずは、この素材で作ったバッグは、どんなユーザーに使ってもらいたいと考えることから始めた。売れるのを待つのではなく、売れるための工夫をするのが自分の役割だと言い切る。

ガズーのレーシングスーツは今のところ販売できないため、量産するのなら廃タイヤから生まれたビジネスバックパックだ。ビジネスバックパックのユーザーは若い男性がメイン。男性が持ち歩きたくなるようなかっこいいデザインで、書類や資料を入れても大丈夫な耐久性も必要。チューブの特徴を調べ、どの部分に何を使えば、素材の良さを生かせるか。試行錯誤を重ね、今までのアイデアを最大限活用し誕生したのが、このプロダクトだ。

愛知の伝統産業「自動車」を再活用

水野 浩行
愛知／エシカルデザイナー

1985年名古屋生まれ。2008年より環境問題の１つである産業廃棄物の削減と価値の有用性を目指したプロダクト制作を開始。2010年自然・人道などへの配慮をコンセプトとしたブランドMODECOを創立。国内に留まらず国外からも多くの取材、評価を受けており、数多くのグローバルブランドとコラボレーションを毎年実施している。ソーシャルプロダクツ・アワード2014受賞。

生駒氏から「男性は何個も鞄を持たないから、カジュアルなシーンでも使えるといい」とアドバイスを受け、持ち手をつけ、カジュアルなデザインを取り入れた。最も苦労したのは、素材の扱い。本来、縫製用に作られていないため、裁断や縫製などの作業が難しかったが、これまでの技術とノウハウのおかげで可能だったと振り返る。

また、プロダクト制作を通じて地元・愛知県の魅力を再発見することができたと語る水野さん。「自動車産業も愛知県の大切な伝統。自動車産業を世に広めることも伝統を伝えることになる」。斬新なアイデアで勝負し続けてきた、水野さんらしい〝新しい伝統の解釈〟だ。目標はデザインが好きで購入したら、素材が車の廃タイヤだった。そこから車に興味をもつ人が増えること。「車に興味がなくても、ファッションを通して車に興味を持ってもらうこともできる。そうなれば自動車産業ももっと元気になるし、結果的に愛知県を活性化させることになる」。

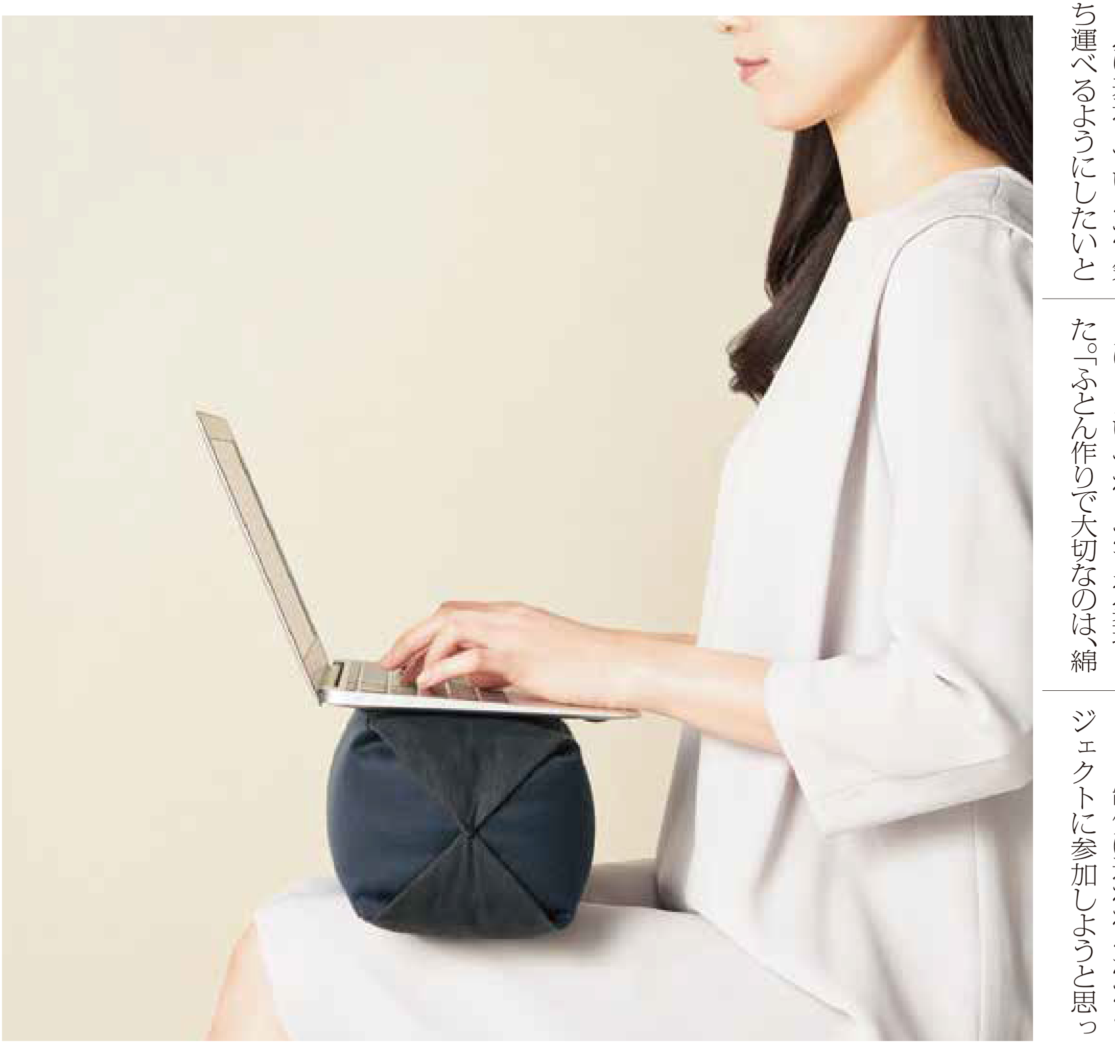
同時に、ビジネスグッズに新しい風を吹き込みたいという。「ビジネスアイテムはデザインが限られているので、ほかと違う何かが必要。そこを考えるのが今後の課題です」。ビジネスアイテムを購入する層は、自動車ユーザーにもつながる。お互いにメリットがあれば事業として成功する。だからこそ挑戦し続けたいと意気込みを語る。

そのためにはともに成長できるバイヤーや企業との出会いが必要。今回のプロジェクトに参加して、知り合う機会を得られたことに心から感謝していると水野さん。彼だからこそ、愛知だからこそ、生まれる製品たち。夢が大きく広がっていく。

日本一のふとん職人がつくる 持ち運べる、くつろぎ

丹羽拓也　愛知／ふとん職人

懐かしくも現代の生活に溶け込む


完成プロダクト「KYO-SOKU～持ち運ぶ心地～」

愛知県名古屋市で五代続くふとん店を営む丹羽さん。親子二代、技能グランプリで総合優勝するという経歴の持ち主。その丹羽さんが挑んだのが、「KYO-SOKU～持ち運ぶ心地～」だ。浮世絵にも出てくる休息する時にもたれかかる道具「脇息」を現代の生活にあうように形を変えた。体を支えるという点は共通しているが、気軽に持ち運べるようにしたいとサイズ感にこだわり、持ち手や、汚れを気にせず外で使用できるようカバーをつけるなど細部にまで気を配った。

愛知県一宮市の尾州産の生地を採用するなど、地元の素材にもこだわりを見せる。中心部分にはそば殻を使い、ブレンドした綿で包むことでしっかりとした安定感とほどよいやわらかさを実現した。「ふとん作りで大切なのは、綿の成形です。今回のプロダクトにもその技術を生かしています」。

現在、丹羽さんのふとんは三年待ち。「待ってくれている人のためにも、丁寧に作ることが大切」と、親子で日々ふとんづくりに励む。父から教わった技術を生かし、互いに切磋琢磨しながら、よき仲間としてふとんを作る。

日々制作に追われるなか、プロジェクトに参加しようと思ったのは、技術を生かした新しい何かを作ってみたいと思ったから。「KYO-SOKU」は、どこか懐かしい雰囲気を残しつつも、現代の生活に自然と溶け込む風合いに仕上がっている。

早い段階で形や素材は決まったものの、サイズに悩んだ。そんなとき、生駒氏から「サイズをいくつか作り、ユーザーが選べるようにしたらいいのでは」とアドバイスを受けた。安定感を求め、大きいサイズにこだわっていた丹羽さんだが、その言葉が素直に響き、大中小の3サイズを完成させた。大きいものは自宅で使い、中のサイズは車やアウトドアで、小さいものは昼寝や腰当てとして使えるようにした。また、気軽に持ち運べることがコンセプトだったので、持ち手をどうするかにも悩んでいた丹羽さん。6月に行われたキックオフセッションの際にサポートメンバーのグエナエル・ニコラ氏から「把手のようなものを端につけたら、持つときに便利だ」と言われ、衝撃を受けたという。「最初、端は持ったときに重さがかかり、簡易的なものではちぎれるから無理だと思ったんです。でも、ユーザーが望むなら挑戦してみようと思い直し、どうやったらできるかを考えるようになりました」。そこで考えたのが、本体の生地の端を重ねて縫製し、強度を出すこと。デザインの一部としての把手が完成した。

愛知の素材と技術から生まれる癒やし

丹羽 拓也
愛知／ふとん職人

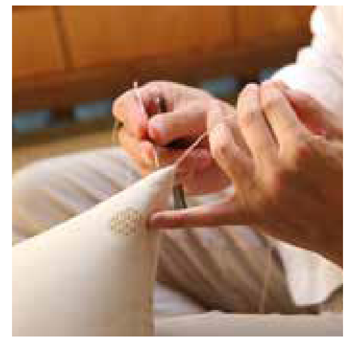
1978年生まれ。丹羽ふとん店五代目。国家検定寝具製作技能士一級。2001年大学卒業。一部上場電器メーカーに就職後、2004年丹羽ふとん店に従事する。2011年、7年目にして寝具業界最速の技能グランプリ総合優勝、厚生労働大臣賞受賞、2013年愛知県優秀技能者表彰。一つ一つ求められた質のふとんをお客に合わせてオーダーメイドしている。

「僕たち職人は、自分の仕事しか見えていないことが多いので、固定概念にとらわれてしまいやすい。今回のプロジェクトを通して、サポートメンバーからの意見はとても参考になりました」。職人としてより視野を広げて、ユーザーの目線にたったもの作りがしたい。丹羽さんは今、新たな創作意欲をかき立てられている。

バイヤーからもさわり心地がいい、使用目的によってサイズが選べるのがいい、など苦労した部分を理解してもらえた。「気持ちが伝わるとうれしいですね」といいながら、バイヤーに制作意図を説明する。「このように直接バイヤーの方と話す機会も少ないので、自分の作品を客観視できるきっかけにもなりました」。

今後の目標は、技能をよりブラッシュアップし、ライフスタイルに合う新しい商品を提案していくこと。そして、愛知県の匠として「MADE IN AICHI」のブランドを確立させたい。

「将来、子どもたちが〝こういう仕事があるんだ〟〝こんなことができるんだ〟と興味をもち、日本の伝統を誇りに思ってくれたらうれしい」。丹羽さんのプロダクトには、子どもたちへの夢がつまっている。



レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 2017
1月17日、プレゼンテーションにて

［LEXUS NEW TAKUMI PROJECT］（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

未来は挑戦する若い手から生まれる

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川 一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやWebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ね、途中経過のプロダクトをうけて行うエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの試作に取り組んだ。

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI ～新しい匠、新しい暮らし～」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。愛知県選出の匠、ふとん職人の丹羽拓也さん、エシカルデザイナーの水野浩行さんの、モノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。